

三重大学 人文学部

法律経済学科

特殊
講義

「協同組合論」



向井 忍 / 地域と協同の研究センター専務理事

現代社会の持続可能性と協同組合の役割

第3回（10月17日）：受講52名（受講生45名・聴講&スタッフ7名）

人口減少社会を迎え、様々な問題と課題がある。自治体の人口が減少することで政治や経済、社会保障にまで影響があり、今あたりまえのようにある暮らしが成り立たなくなる。生協は、その時代ごとにある社会的課題の改善に向け協同の力で取り組んできた。人口減少社会で暮らし続けられる生活圏の維持が協同組合の役割である。何ができるのか、みなさんと共に考えていきたい。

【講義の主なポイント】

- ・日本は初めて「人口減少社会」を迎える。3大都市圏を除いた30万人以上の都市圏は人口減少により都市機能を提供するサービス産業が成立しなくなる恐れがある。長期にわたり人口減少は続く見込みである。
- ・少子高齢化による社会的な課題に市場の高齢化がある。高齢化ビジネスが成長し、子どもや若者の生活環境や教育の質劣化がすすむ（プレストン効果）。また、非正規雇用のひろがりや、在留外国人の雇用増加などがある。
- ・人口の減少は、現代社会を支える政治・経済・世代間の支え合い（家系断絶や家族の消失）の危機でもある。当たり前にあったくらしが通用しなくなる。誰でも参加できる社会の構築、社会イノベーションの実現が必要である。
- ・地域分散型社会は人口や地域の持続性、健康、格差、幸福など持続可能なデザインが描ける。
- ・生協はそれぞれの時代ごとにある社会的課題の解決に向け様々な取り組みを人と人との協同、たすけあいで改善を図ってきた。
- ・協同組合は、社会的目的で事業をおこなっている非営利法人である。経済的側面と社会的側面、環境的・文化的・教育的側面の循環が特徴で、人口減少社会の中で暮らし続けられる生活圏を維持することが協同組合の役割だと考える。住民自治と地域の循環経済のインフラをつくりながらすすめていくことが大事である。
- ・「協同組合の思想と実践」はユネスコ世界無形文化遺産に登録されている。

第2回講義…受講生の感想レポート（一部抜粋）

Aさん（2年生）

少子高齢化社会というのは分かっていたつもりだったが、人口増減のグラフをみると、改めて危機感を覚えた。また、自治体戦略2040年構想などから、各方面で人口減少に伴う社会変容の対策をとりはじめていることを知り、この現状は（私は）このまま現実をあまり詳しく知らないと、社会で生きる当事者として、むしろ社会問題に対してアテを張り、情報を把握していかなくてはいいと思った。

そして、社会問題を解決するためには、「出生率を上げる」だけでなく、若者や高齢者を支える社会ではなく、全員が協力して支えあう全員参加社会を目指していくなど、実現可能・持続可能な方法を考える必要がある。

Bさん（4年生）

・人口減少により、産業衰退や環境の劣化等が進む。という単純な話だけでなく、サービスや雇用、法、税金等、あたりまえに感じている現状の社会制度全てが維持できなくなり、変わらざるを得ないことを強く感じた。

・人口減少問題に対して、各自治体が対策を出しているか、各々に合わせた対策が必要かということ。

Cさん（4年生）

人口減少は日本の現在の環境を大きく変えてしまう、生活に直るもの、深刻な問題だと改めて感じた。
①地内の住みかを作るために、協同組合組織は地域に根ざした組織であり、これから大きな役割を果たしていくのだと思う。

住みか宅居の例にあるように、利用者のひとりひとりの状況、要望に合わせたサービス提供が求められる。

Dさん（年生）

愛知県。「東日本震災の被災者の支援」など、協同組合の具体的な活動を聞いておもしろい。イメージがはっきりした。特に、「おれんちあいの会」の活動から、「相互扶助」のイメージが定着した。この活動の場合、交通費にプラスしてお金の費用を集めていたが、その費用は一体何に使われているのか気になる。ボランティア的活動の他に思えたからである。

Eさん(2年生)

協同組合はただ決まったサービスを提供するだけでなく、会員の相談によってそれぞれのニーズに合うサービスを提供できるように努力していることが分かった。特に、高齢化社会なので高齢者の生活を支えることが必要になってくるが、人によって事情が様々だから、最善のサービスを考えることは大変だと感じた。しかし、協同組合の存在意義を考えると地域の人々のよりよい生活のためにサービスを考えることは重要なことであるため、できる限りの対応をしなければいけない。また、人口減少が進んでいるので組合員はどのように地域社会と関わっていくかを考える必要があると感じた。そのような社会だからこそ支え合わなければいけないからである。しかし、それぞれのニーズに合わせるのにも限界があると思うので、関わり方を考えるのは簡単なことではないと感じる。

Fさん(2年生)

自治体は地域社会から離れて存在することができず、自治体の規模が縮小すると地域に与える影響も大きくなると思った。人口縮小社会で日本が国としてどう生き残るのかを考えると、その重要性を再度理解した。人口減少に伴い、参加型民主主義により次の社会にバトンを渡すために、少ない人口でどのようにして地域コミュニティの持続可能性の危機を招いていることを止め、コミュニティを維持するかを考えることがとても重要であることがわかった。どのようにして行政や住民、自治体との関わりを持つかを考慮すべきだと感じた。10年後、20年後にも、経済的側面、社会的側面、教育的側面のいずれも欠けることなく協同組合が存在しているか不安であるとも思った。

Gさん(2年生)

人口減少、少子高齢化が引き起こす問題は単に地域の衰退だけでなく、民主主義や市場原理が今当たり前にあると思われている理念が崩壊しかねないという話も、少子高齢化する現状へのさら進んだ危機感を引き付けられたように思われる。この状況の中で、どのように福祉や経済を活性化し、問題を解決していくかが、協同組合は大きな役割を果たしていることを知り、生活協同組合のように、住み家としての地域の資源を活用しながら住民の希望に応えていくという在り方は協同組合ならではの、行政よりもより細やかな親身で柔軟に地域へのサポートを実現する力を得られると感じた。

Hさん(2年生)

今まで少子高齢化の問題を考えると、うとモが少なくなり高齢者を支える人がいなくなるということや、働き手がいなくなるなど、ありふれた考えしか持っていなかったが、シルバー民主主義やフレックステーション効果についての話を聞いたとき、今まであたりまえだった構造が、そもそも崩れ去っていくと考えると前より危機感をもった。このように時代の中で協同組合は、様々な問題に住民が参加して支援できるような取り組みや、地域の人とつながり、一人一人と向き合えるような取り組みを行えるような団体であれば、少しでも日々の暮らしがよくなるのかなと思った。

生活協同組合は今の日本では重要な役割を担っている部分が多くあると思うので、これからますます社会の中で活躍していくと思うと感じた。

Iさん(2年生)

少子高齢化がもたらす日本社会の危機は単なる人口減少という問題ではなく、高齢者が増加することによる投票数の高齢化、高齢者に有利な政治や、年金や医療介護ばかりに資源がわたる子育てや教育の支援金が減っていくことは少子化を促進し、より少子高齢化が進んでいくという悪循環が生まれ出さぬことを知って、今までよりも少子高齢化に対して危機感を感じました。投票権が18歳に引き下げられたことも、初めは政治に関して分からないことが多く参加する若者がいないので18歳に引き下げても意味がなかったらうと思っていたが、自ら政治に関心をもち若者の生活環境を良くしていくために政治参加はとても大切なことと思った。

また認知症高齢者が増加していく中で、行政はその家族と支援をすることはできるかもしれないが実際一つ一つの家族に介入して認知症の方を、その家族の生活も改善していくことは難しい。そんなときに援助できるのが協同組合であり、各家族に寄り添ったサービスを提供することができ、第3セクターの役割を担う協同組合はこれから少子高齢化が進む日本社会でもっと活躍して行って欲しいと思いました。

以上